

〔新刊紹介〕

外村彰編 『高祖保書簡集 井上多喜三郎宛』

野田 敦子

七八

高祖保（一九一〇～四五）は、「椎の木」「苑」「文藝汎論」等で活躍した彦根ゆかりの抒情詩人である。詩誌「門」を主宰し近江の詩人・井上多喜三郎に詩才を認められ、のち東京に転居した高祖は、「雪」で文藝汎論詩集賞を受賞した。上京後も井上との交際は続き、井上の個人詩誌「月曜」に詩文をたびたび寄稿した。

本書には井上宛の書簡一三九通が初めて収録されている。それらは、高祖が東京に転居してから出征するまでのもので、井上からの惠送品の謝辞や「月曜」への賛辞が多い。さらには、未発表の作品や井上が私費で高祖の詩集を出版した時の喜びようが読み取れる。これらの経緯は、丹念になされた注釈や時おり添えられている写真からたどることができ、高祖の息づかいや生きた時代まで感じ取れる。また、高祖が井上に贈った自筆詩集『信濃游草』の写真が全頁掲載され、筆致を再現したかたちで全文復刻されている。造本は、岩佐東一郎の詩集『紙鳶』を参考になされている。高祖は、『紙鳶』が発行された時期に、同様の装幀で『独楽』を

上梓しようとしていたが出征で果たせなかった。それゆえ、未刊詩集『独楽』の判型のイメージがわくように工夫されている。

地道な研究に裏づけされたこの書は、書簡集として生彩を放っているだけではなく、高祖の人間像や戦前の詩人の交流等をうかがうことができる優れた研究書ともいえる。今後の高祖保研究に、欠くことのできない貴重な一冊である。

（龜鳴屋 二〇〇八年五月 二〇七頁 本体価格三〇〇〇円）

（のだ・あつこ 本学研修生）